



没後90年記念の「小樽多喜二祭」で…

倉田稔師が記念講演

小樽は云うまでもなく、小林多喜二を育んだ街です。

1903年、多喜二は秋田県で生まれ、4歳の時、伯父の勧めで一家は小樽に越してきました。住まいは現在の築港駅付近であり、多喜二は潮見台小学校を卒業後、小樽庁商、小樽高商を経て、北海道拓殖銀行小樽支店に就職しました。

生誕120年、没後90年に当たる今年、多喜二実行委はその記念の集いを開催しました。

第1部は、市民構成劇「地区の人々火を継ぐもの」であり、第2部が、記念講演「小林多喜二と小樽—多喜二の育った小樽の歴史と彼の人生をたどる—」です。

なおこの講演をした倉田師は、社大の助教授を経て、小樽商大の教授や図書館長を歴任すると共に、倉田史観による小林多喜二研究者でもあり、多喜二に関する著書も多数著しています。

以下は、その倉田稔師による当日の講演の概略です。

日本の歴史を観ると、明治維新から第2次世界大戦敗戦までが78年、敗戦から今日までが78年、となる。

日本は、明治維新という薩摩を中心とした侍たちの戦争によって、徳川幕府を打ち倒した。そしてその後、敗戦まではずっと、戦争の時代であった。

国内的には、大逆事件後、日本は「冬の時代」に入り、大正デモクラシーなどの動きの影響もあって、1922年には日本共産党が創立された。しかし、「戦争反対」を掲げる政党は、時の権力者にとっては絶対に許してはならない存在であり、すぐに弾圧が加えられた。

1925年、普通選挙制が導入される一方で、治安維持法も成立した。また、第1回普選では労農党という政党から数人の議員が当選したことから、戦争を推進していく権力者にとってはそれなりの脅威となり、特に「その裏で操っている」共産党を壊滅することは焦眉の課題であった。

日本は、1918年のシベリア出兵、31年の満州事変を経て、37年には日中戦争へと突入していく。

勉強熱心であった多喜二は先のとおり、エリート校である小樽高商へと進学する。しかしこの時期、多喜二は商業よりは、美術（主には絵画）と文学に没頭していく。また、マルクス等の社会科学にも興味を持っていたようだ。

1924年、小樽高商を卒業した多喜二は、拓銀に就職する。

25年には磯野争議が、27年には小樽港湾争議が起き、いずれも労農側が勝利する。また、知り合った田口たきによって酌婦等の現実にも触れ、たきを我が家に引き取ったりもする。

こうしたことを通じて、多喜二は社会そのものにも多大な関心を抱くようになり、小説という形でそれを表現するため、わざわざ当事者への入念な取材を行った、という。そしてこれらの小説が文壇中央で認められ、多喜二は「小説家」となっていく。

しかし、文壇の一角を占めるようになると、その現実的かつ「過激」な小説内容から、「如何なものか」という声も挙がるようになり、多喜二は職場に居づらくなる。拓銀は解雇を目論見、結果、多喜二は依願退職となった。

退職後、多喜二はいつとき、かなり落ち込んだようだ。

しかし、周りの大いなる励ましもあって、多喜二は上京を決意する。

上京後、多喜二はプロレタリア文学同盟の書記長を務める一方、「非公然」の日本共産党にも入党する。

他方、日本は、27年の昭和恐慌、28年の3. 15弾圧、29年の4. 16弾圧及び世界恐慌、31年の柳条湖事件と満州事変など、国内の混乱と戦争遂行のための策動が強化され、それに反対する人たちへの弾圧も「ピンセットで摘まむように」徹底して行われていった。

こうした状況から、特高（特別高等警察）にとっては、多喜二は眼の上のタンコブであったものの、地下に潜っているため、捕まえることもできなかった。そこで、特高はスパイを配置し、1933年2月、「路上連絡」中の多喜二を、ようやく捕らえることができた。

多喜二はその日のうちに、築地警察署で、目も当てられぬほどの拷問を受け、死亡したのであった。しかし、当局の発表は、「心臓死」であった。

こうして左翼や共産主義者は徹底して弾圧の対象となり、これより先は、右翼系による戦争推進へと、歴史は動いていく。

やがて、1945年、日本は敗戦を迎えた。

そしてそれから、約80年が経とうとしている。

戦後、日本は、世界で唯一の「戦争放棄」の憲法、つまりは平和憲法を創り、今日まで曲がりなりにも、平和の道を歩んできた筈であった。

しかし、キシダは、ゼレンスキーですら「要らない」と言った攻撃用の兵器を、バイデンから二つ返事で買ったのであった。まさに、アメリカに対してだけは、「聞く耳」を持ったいたのである。

今日、日本の権力者や政治屋は、憲法の理念に真っ向から反して、世界の様々な動きを利用して、戦争への道を歩もうとしている。

そうであるからこそ、多喜二が歩んできた道と多喜二が創作した小説をシッカリと学ぶことこそが、今日の私たち日本国民の責務なのではないだろうか。

このことを強調して、本日の話を終えたい。

社大同窓会幹事会を開催

北海道同窓会会長（学部第23期） 瀬戸 雅嗣

6月24日（土）に、2023年度日本社会事業大学同窓会幹事会が清瀬市の母校第3会議室で開かれました。新型コロナウイルス感染症まん延のため、対面での開催は4年ぶりとのことでした。

出席したのは同窓会役員のほか運営委員4名、都道府県同窓会代表者（8名）で、道同窓会からは私と千葉副会長が出席しました。また、大学からは理事長、学長、専務理事、事務局長がオブザーバー参加しており、総勢26名が出席しました。

3月に急逝した岩崎俊雄同窓会会長のご冥福を祈る黙とうで開会。

校歌を斉唱した後、大学の理事長と専務理事から挨拶がありました。その中で「前年度・今年度と2年続けて入学者数が定員割れ」という衝撃的な報告があり、出席した一同が目を丸くする場面がありました。

定員割れ問題については大学としても手をこまねいている訳ではなく、今年度から総合選抜型（高校生活での取り組みを評価して小論文と面接で選考）を導入、更に今後は学校推薦型選抜に指定校推薦を検討するなどしているとのこと。これに関しては同窓会としても協力すべき問題であり、教員による高校訪問などへの協力を強化する必要があると思われます。

また入試要項含む大学案内を同窓生を通じて入学希望者に渡すことができるように準備しているとのことなので、近くに希望者がいる場合は道同窓会に連絡をしてほしいと思います。

幹事会の議事は、①2022年度事業報告・決算、②2023年度事業計画・予算を審議した後、次期役員を選任を行いました。前述した通り岩崎会長が亡くなられた後、会長が空席となっていたため、3年に一度の改選期にちょうど当たることから、この時期まで会長を決めずに副会長が協力して会長の代行を行っていたようです。審議の結果、新会長に竹田幹雄さん（学部40期、2000年卒業、川崎市健康福祉局勤務）が選任されました。まだ40歳代の若い会長となりましたが、同窓会会員数17,635人のうちいわゆる清瀬世代が9,450人と半数を超えてきたという背景もあり、同窓会自体の若返りも大きな課題であったことから、今後の活躍に期待し、道同窓会も協力していきたいと思います。

また、大学とのパートナーシップの推進も話し合われました。2022年度からは「社会福祉セミナー」を大学と同窓会が共催して行っており（岩手県と奈良県、2023年度は埼玉県と静岡県）、今後もさらに広めていきたいということで、道同窓会の社会福祉セミナーについても、今後検討の余地があると思われます。

最後に出席した全員が発言し、やはり定員割れ問題に衝撃を受けており、過去10倍以上の倍率があった状況と比較し、隔世の感があることに心配する声が多くありました。

全員が発言したことで、15時終了予定を40分ほど超過するという長い会議となったものの、社大の今後を憂慮する同窓会の熱い想いを感じた幹事会でした。

なお、夕方よりは、道同窓会の恒例の懇親会が清瀬駅前の居酒屋で開かれ、他同窓会メンバーや、教職員など11人が参加して、楽しいひとときを過ごしたことを付言しておきます。

2023年事業計画等の承認について

北海道同窓会事務局長（学部第19期） 儀藤 敦

例年ですと、毎年1月に開催しておりました支部定期総会がコロナ禍等諸般の事情により開催できない状況が続いておりました。

5月に入り、新設された運営会議（会長、副会長、事務局など）を開催し、現状を共有した上で、支部（道同窓会は、正しくは「社大同窓会北海道支部」）の運営の正常化と定期総会を書面で早急に開催することを確認いたしました。これにより、6月18日にメール、19日には郵送で、各会員あてに総会議案書等を送付しています。締め切りの6月30日までに27名の会員から連絡があり、全員から全ての議案に賛成をいただきました。

議案は、以下の通りです。

- * 第1号議案 2022年事業報告
- * 第2号議案 2022年会計報告
- * 第3号議案 2022年秋季セミナー会計報告（未開催の為、賛否を問わず）
- * 第4号議案 監査報告
- * 第5号議案 2023年事業計画案
- * 第6号議案 2023年秋季セミナー開催案
- * 第7号議案 2023年事業予算案

なお、今年度の事業計画につきましては前年の事業計画を踏襲しているものの、コロナが5類に移行したこともあり、前年まで開催できなかった秋季セミナーの開催や対面での総会開催を視野に入れています。

停滞していた支部活動につきましても、みなさまのご意見を聴きながら、活性化を図りますので何卒よろしくお願いたします。

なお、以下に、今年度の事業計画を再掲しますので、同窓会メンバーだけではなく、「アガペ」の読者のみなさんも、積極的にご意見をいただければ幸いです。

* 2023年事業計画

1. 2023年新春セミナーの開催

コロナ禍の状況にあり、開催は困難と思料されます。ただ、昨年同様に総会を実施します。

2. 2023年秋季セミナー（日社大市民公開セミナー）の開催

コロナ禍の状況を分析の上、実施を判断します。

3. 2023年「あな交」の開催

これまでの実施成果を踏まえ、母校及び母校同窓会、かつ道同窓会の活性化の一環として、母校及び関東圏社会福祉系大学在学生の「北海道」認知度を高めると同時に、道内社会福祉施設等への着実な就職等を促進していきます。このことにより、北海道における社会福祉現場等の力量向上にも寄与していくことができるようになります。

主催は母校同窓会ながら、道同窓会としても積極的に関与し、さらに多くの他県同窓会等との共催を追求していきます。

日程は、同窓会幹事会及び学内学会開催日（例年は6月の最終土・日曜日）を想定し、道同窓会としても準備を進めていくものの、開催そのものがコロナ禍の状況次第であることは否めません。したがって、以下は、開催が可能な場合の内容です。

- 1) 実施にあたっては、会長以下が「あな交」に出席するとともに、当日活動できる道同窓会員の積極的参加を要請します。
- 2) 用意するものは、①北海道地図、②道及び道内自治体のパンフ等、③道同窓会員が関わっている施設等についての求人票、④同施設の紹介パンフ等、です。これらを事務局で集約し、ファイル化します。また、⑤公務員試験の日程及び内容等も同様です。
- 3) 大学事務局の協力を得て、「あな交」開催1ヶ月程度前から、「北海道にお出でキャンペーン」コーナーを学内に設営します。
- 4) これまでの経験を踏まえ、同窓会員が施設長等の場合は、現地にて就職試験もしくは、それに準ずる方策を講じることができるような工夫をすることで、「即断即決」できる体制を強化していきます。
- 5) 前回の「あな交」に参加した学生に対しては、事前にMail連絡を行い、当日は本人のみならず、学友たちの参加も要請します。
- 6) 前回の経験から、面接時のちょっとしたお土産も考慮した方が良いと思います。
- 7) 以上の実施にあたっては、正副会長の指示の許、事務局長及び事務局次長（広報組織委員長が補佐）が大学事務局と密接な連絡を取り合って、準備を進めていきます。
- 8) 今年度は少なくとも、同窓会幹事会は6月24日（土）に対面会議となるため、幹事会当日に上述の流れで「北海道キャンペーン」を実施します。具体的な内容については、同窓会事務局と連携しながら運営会議等で鋭意検討していきます。

4. 機関紙「アガベ」の発行

12年12月に創刊号を発行以降、これまでに通算第38号まで発行済です。今年度も年3～4回程度の定期発行をめざします。

また、「アガベ」発行にあたっては、道同窓会及び会員の動向のほか、会員相互の交流の場として、「社会福祉随想リレー」を継続していきます。

その他、その時々に応じた特集等も組みながら、社会福祉情勢や社大の動向もビビッドに伝えていきたいと考えています。

5. 「新人」の発掘

母校同窓会名簿では120人程度の道内在住の同窓会員（実際には150人は超えていると思われます）のうち、2023年1月1日時点での支部会員数は95名となりました。今後も母校や母校同窓会とも連携を取りながら、在学生及び卒業生の資料動向把握等有効な情報交換を積極的に行っていきます。またコロナ禍にあっても数人の卒業生が新たに道内に就職していることから、現状把握に努めます。

また、「アガベ」を通じて、道内同窓生の連携強化に努めていきたいと考えています。

6. 母校同窓会への提案の実現

社大（教育分野）、社会福祉現場（実践分野）、双方の力量向上のためには不可欠な課題であると考え、母校同窓会長あてに送付した提案の実現をめざしていきます。

母校同窓会として、母校自身が「社会福祉界のリーダー」としての力量を発揮できるよう、また母校が責任を持って推し進めていけるよう働きかけを行います。ただ、現状では母校自身はそれほどの「危機感」を持っているように見えないため、母校同窓会が母校に関わりを持てるよう、北海道同窓会として積極的に発言や支援を行っていきます。

7. 幹事会開催の定例化と運営会議の設置

正副会長及び事務局を中心とした実務体制の確立を図る上で、幹事会開催の定例化と共に運営会議を新設しました。幹事会は会則に基づき年1回以上の開催を予定しますが、何分広域であることから適宜開催が難しい側面もあります。

そこで、書面評決鑑のとおり、5月14日（日）に運営会議を対面で開催しましたので、今後も適宜、運営会議を開催していきます。

また、新役員による支部活動が円滑に進むよう、さらなる集団的な運営をめざしていきます。

8. 道同窓会としての学習機能の向上

コロナ禍以前は、年2回セミナーを開催し、①その時々社会福祉情勢の把握と分析、②社大生（社大卒業生）の役割の確認、③その他社会福祉実践等に必要なことを積極的に学び、かつ検証してきました。今年も新型コロナウイルスの感染状況を見ながら、可能な限り従来と同様学習機能向上に取り組めます。

また、特に必要と思われる課題が生じたり、母校教員等が来道した際には、上記とは別に随時の研修の場を設けていきます。加えて、道同窓会員が関係している組織、団体及び法人等の研修会等についても、特に必要と思われる事項に関しては、道同窓会員及び関係者等の協力を得て、積極的に周知し、参加を呼びかけていきます。その梃子として、次項の「ヨコイト」の積極的な活用を図っていきます。

これらを実現するために、道同窓会員の積極的な情報提供もよろしくお願いいたします。

9. 「北海道社会福祉系大学等卒業生等交流会」（「ヨコイト」）の発展

18年3月に正式発足し、18年10月の秋季セミナーの際には特に日福大卒業生を中心に準備し多数の参加を得ることができました。また小樽等一部の地域では継続的な交流も図られています。

道同窓会としてはこれまでの方針どおり、①機会あるごとに、他大学同窓会や関係団体等との協力を深め、その交流を積極的に促進していく、②特に市民公開セミナー（秋季セミナー）開催の際には、現地の関係者、行政等の積極的協力及び参加を追求していくことを通じて、「ヨコイト」の発展に寄与していきたいと考えています。

10. 「支部会計に仮払いの導入」

ゆうちょ銀行のATMで硬貨を伴う出金の場合、手数料が新たに発生することになりました。

そこで支部事務局で仮払いとして現金を管理（1万円程度）します。なお小口現金出納簿を作成し、入出金を管理します。

11. その他

その他、同窓会として必要と思われることを積極的に推進していきます。

* 母校同窓会の動きなど（詳しくは、社大HPにて）

- ・ 専門職大学院リカレント講座へのお誘い 2023-06-24
- ・ 【延長申込受付】OB・OG交流会申込み開始! 2023-06-16
- ・ 「就活・全国フェアin社大」情報コーナーを設置しました 2023-06-07
- ・ 北海道支部 同窓会報「アガベ」第38号が完成 2023-04-25
- ・ JCSWネットワーク職場体験応援制度2023年度スタート! 2023-04-15
- ・ 北海道支部 同窓会報「アガベ」第37号が完成 2023-03-25
- ・ 沖縄原宿会（日本社会事業大学同窓会沖縄県支部）公開研究会のお知らせ!
2023-03-01
- ・ 社会福祉セミナーin埼玉 申込み終了いたしました。 2023-02-08
- ・ 日本社会事業大学専門職大学院 古屋龍太教授最終講義のご案内 2023-02-08
- ・ 母校公式YouTubeにて、大学紹介動画を公開いたしました。ぜひご覧ください!
2023-01-18

*** 編集後記 ***

まず、予定より「第39号」の発行が遅れたことをお詫びします。

「三寒四温」とはこの時期に使う言葉ではないものの、この頃の北海道の気候は、寒かったり、ようやく暑くなってきたと思ったところが、また涼しくなったり、そして、とっても蒸したりと、兎に角、異常としか云いようのない毎日が続いています。

そうした中、同窓会メンバーのみなさんにおかれましては、社会福祉実践等に日々、邁進されていることと拝察します。

さて、「アガベ」第39号は報告が中心の内容となってしまったものの、結果的には、社大全体、道内、そして地域の動きが、少しでも観えるように編集したつもりです。

また、前号でお知らせしたように、大変残念なことに、我が道同窓会の顧問でもある岩崎さんが亡くなられ、氏の「随想」も最後まで書いてもらうことができなくなりました。この「随想」は、その名のとおりに「リレー」としてありますので、次回以降は、新たな方に、バトンを受け取ってもらうべく準備を進めています。また、「私も書きたい」、「あの人はどうか」という提案があれば、大変嬉しく思っています。

では、こうした不安定な時期ゆえに、みなさん、健康第一でお過ごしください。